

外七五〇はフィルムでアマチュア用としては一番簡単であるがその性能はあまりよくない。撮影上の原則をのべれば、

(一) 感板の装填。

(二) 赤色フィルターにより短波光線遮断。

(三) 露光・撮影

である。注意を要するのは(一)で乾板を木製の取枠に入れば、赤外線は木を通過して乾板を忽ち廢品たらしめてしまふ。近年の赤外線用材料の發達に(二)のフィルターの赤色をだん／＼うすい色にかへつゝある。アマチュアがそれを試みるときは淡紅色のフィルター(例へばさくらフィルターRIなど)が適當である。赤色フィルターをかけて撮影して先づ氣づくのは空が眞黒になる事と、青葉が眞白に寫る事である。これはどうしてさうなるかと言ふと、空は文字通り青空で赤外線を含まない(この表現は少し當らないが)、よつて眞黒になる。又青葉は紫外線を吸収して赤外線を出す。よつてこれも白くなる道理である。この眞黒な空をきら／＼人もゐるが、それは主觀上の問題であつて、長い間普通寫眞の白い空(これは寫眞的虚偽なのである)を見なれた目には黒い空も變に見えよう。しかし山岳を好む諸君はしば／＼山に於て見る空が青を通りこして暗黒であるのを見た事があるであらう。それらの諸君は容易に黒い空を是認するであらう。更に遠景は乾板上に驚くべき精密さを以つて記録されるのであ

る。

しかし、その波長の關係から長焦點寫眞機に於ては少し普通撮影のときよりレンズを前に出さぬと(半耗位)するといふ點は結ばぬやうである。又空を多く畫面にとり入て露光を少なめにして撮影すると擬夜景が出来てしまふ。又山岳に入つては赤外乾板の獨斷場であるから、山岳を愛する人はよろしく赤外線寫眞を心得るべきである。赤外用フィルムも豊富になつてきた今日、盛に諸君が赤外フィルムを驅使して、更に引いては赤外寫眞界の進歩に寄與せられん事を切望しながらペンをおく。

日本語再建私説

五 B 長 田 夏 樹

去年十一月一日の朝日新聞の中間讀物の欄に高橋康又氏の「朱筆のあと」と言ふ文があつた。『花のやうだ』と書いた「花のやうだ」と直された。「これから氣をつけやう」と書いた「氣をつけよう」と訂正された」と言ふ冒頭で『最近小さな隨筆集を出すに當つて言靈の幸は、小國の言葉の六ヶしさをつく／＼味はつた。朱筆を投げて「とうとうまいつた」と悲鳴をあげたら「たうとうまゐつたか」と、とどめを刺された。』と言ふ文句で終つた笑話めいた文がのつてゐた。こ

れが本當に日本の言葉であつたなら、たしかに氏の言ふ如く大變むつかしく又やつかないものであらう。しかし、幸なるかな文字である言葉の表現法そのものではない。我々はかう云ふ煩雜さにはなれてゐるから、なんら不便を感じないばかりかそれを美しいものに感じる。習慣の根強さが不便に對する感覺を麻痺させてしまふ。我々は我々で覺えてしまつたのだからしかたがない。しかしこれからの子供が大變である。昔は劇一本で出世が出来た。しかし今はさうはゆかないと同じやうに、これからの人間には負擔が我々の數倍にもなるだらう。假名、平假名、モノシラブルな従つて同音異語の多い漢字音、そればかりか歴史的假名づかひ、これを全部知らなくては日本語は發表出来ないのか、そんな馬鹿な事はあるまい。これではさしせまつて支那戰後文化工作に困るではないか。漢音漢字の影響を受けない前の日本語は實に美しい科學的な言語であつた。先づ色々の例を上げることにする。

名詞	動詞
me	mir-u
ku(ti)	ku(h)-u
ha	ham-u
te	tor-u
asi	hasir-u
ki	kik-u
ka(hana)	kag-u
tume	tumer-u

耳は萬葉以前に「^{ミミ}ミ」と言つた、朝鮮語であり、^{ミミ}ミ(耳)と關係あり、^カカ(カ)と言つた今は「カ」と言つた。今「カ」は香ら意にもちられる。爪は kak-u が kag-u になつた。元來ク(ク)と云ふ(靈あるもの)と言つた。蛇 oroti = 丘の靈、蛇 miduti = 水の靈等。

耳は萬葉以前に「^{ミミ}ミ」と言つた、朝鮮語であり、^{ミミ}ミ(耳)と關係あり、^カカ(カ)と言つた。今「カ」と言つた。今「カ」は香ら意にもちられる。爪は kak-u が kag-u になつた。元來ク(ク)と云ふ(靈あるもの)と言つた。蛇 oroti = 丘の靈、蛇 miduti = 水の靈等。

○ na, no, ro, と云ふ接間語、

- minato = mi水 + na + to戸
- manako = ma目 + na + ko 接尾語
- manaziri = ma目 + na + siri後
- yanagi = ya矢 + na + ki木
- kinako = ki黄 + na + ko粉
- minamoto = mi水 + na + moto本
- oroti = o丘 + ro - ti靈

sak 咲
a-zu
v-tari
u-go
u-toki
e-ba
e-^o

osh 推
a (oshi 不可)
v
u
e

mot 持
a (mochi 不可)
v
u (Motsu 不可)
e

- | 動詞 | 名詞 |
|-----------|--------------|
| ko(h)or-u | ko(h)or-i(水) |
| kir-u | kir-i (霧) |
| tob-u | tob-i (鳶) |
| ho-ru | hor-i (堀) |
| | hor-a (洞) |
| oy-u | oy-a (親) |
- 以上の外ほとんどすべての動詞はその運用形に於て抽象名詞普通名詞を作る。

日本の假名に於て「バ」が「ハ」の濁音となつてゐるが「バ」は「バ」の濁音であつて決して「ハ」の濁音ではない。これは「ハ」が pa, h, hwa, 等をすべてかねてゐた證據となるものである。

動詞が連用形詞又は未然形より名詞になるもの。

